

地域情報（県別）

【山梨】県初のペインクリニック外来を開いた開業医が辿ったキャリア-土地邦彦・どちペインクリニック理事長に聞く◆Vol.1

2020年4月3日（金）配信 m3.com地域版

山梨県では少ないペインクリニックであり、在宅医療も行う。さらに有床診療所として緩和ケアにも取り組む。そんな珍しいクリニックが中央市にある。医療法人「どちペインクリニック」理事長の土地邦彦氏は大学卒業後、麻酔科医として経験を重ね、1992年に開業した。全国的にクリニックに在籍する麻酔科医は現在も0.5%と少ないが、土地理事長はどんなキャリアを辿って、なぜ開業したのか。（2019年12月26日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

—まずは、どちペインクリニックの概要についてお聞かせください。

医療法人「どちペインクリニック」は、有床の「玉穂ふれあい診療所」と「玉穂訪問看護ステーション」を運営しています。玉穂ふれあい診療所では、内科のほか私の専門である麻酔科を標ぼうし、ペインクリニックとしても診療しています。外来診療だけではなく在宅医療も行い、緩和ケアにも取り組んでいることが特徴です。

在籍するスタッフは40人いて、内訳としては常勤の医師が私を含めて3人、非常勤の医師が1人、外来で働く看護師が6人、臨床検査技師が2人、診療放射線技師が1人、事務員が6人、病棟で働く看護師が9人、アシスタントが3人、厨房スタッフが4人、訪問看護ステーションに在籍する看護師が5人です。有床診療所ということもあり、地方のクリニックとしては割と大所帯な方でしょうか。

1日の患者さんの数は60～90人ほどです。患者さんの主訴はさまざまですが、クリニックの特性上、やはり腰痛など身体の痛みを訴えるご高齢の方が目立ちます。在宅で診ている患者さんは35人で、一般的な在宅クリニックと同じように、認知症にかかっているご高齢の方や末期のがんの方が多いですね。ベッドは19床あり、現在は8人が入院しています。



理事長の土地氏（場所はクリニックの食堂・休憩スペース）

—先生は開業するまでどんなキャリアを辿ってきたのでしょうか。

私は富山県の農家に生まれ、父は私が子どものころから医師になることを強く勧めていました。「食いつぶれることはないし、戦争が起きても最前線で鉄砲玉を撃つことはないから」と。小さかったころは受験勉強の大変さなんてものは知りませんから、「じゃあ、なろうかな」と気楽に考えていたものです。

麻酔科を専門にしたのは、母校である信州大学医学部の同科の先生が人として魅力的だったためです。1974年に大学を卒業して恩師たちの元で研修を受けた後、1977年にここ山梨県に来ました。

私の実家は経済的に余裕がありませんでしたから、私は全日本民主医療機関連合会（民医連）の奨学生として学費を借りていたのです。民医連とは、戦後、さまざまな理由によって医療から見放されてしまった人々に応えようと開設された団体で、現在、全国で約1800の医療機関や老人福祉施設などが加盟しています。「恩を返す」といえば言い過ぎかもしれませんが、私は学生のころから「お世話になった民医連が関わる病院で働こう」と思っていました。

それで、研修を終えた後に山梨県の巨摩共立病院（南アルプス市）に入職しました。巨摩共立病院は、山梨民医連に加盟する山梨勤労者医療協会が運営する病院です。



同院の待合スペース

——巨摩共立病院で県内初のペインクリニック外来を開設したそうですが、そもそも、県内に麻酔科医が少なかったという背景もあるのでしょうか。

そうですね。私が山梨県に来た1977年、麻酔科を専門にする医師は私を含めて2人しかいませんでした。その翌年に山梨医科大学（2002年に山梨大学と統合）が開学し、以来、徐々に麻酔科医の数も増えていきました。

巨摩共立病院は当時、150床ほどの規模の小さな病院でしたから、手術室での仕事だけでは時間が余ってしまいます。それで、ペインクリニック外来を開いて午前は外来、午後には手術室といったように仕事を調整したわけです。

若いころに小さな病院で働いたのは良かったかもしれません。医師も10人ちょっとしかいませんでしたから、当直では風邪や腹痛、外傷などさまざまな患者さんを診ましたし、救急搬送されてきた患者さんの緊急手術にも麻酔科医として立ち会いました。そんな風にしてジェネラルな技術を高めていったことは、開業後の外来にも実に生きました。

——先生はその後、1984年に巨摩共立病院と同じ山梨勤労者医療協会が母体の甲府共立病院に移り、1992年に開業されました。2016年の厚労省の調査ではクリニックに在籍する麻酔科医の割合は0.5%と少ないのですが、なぜ開業を？

医師本来の仕事に軸にしたかったからです。病院の中にいると年次を重ねるにつれていろいろな役割が増えてきますから、率直に言えば、それがわずらわしかった。もう一つは、ペインクリニックとしての診療にもっと力を入れていきたい思いもありました。私は外来が好きでしたから、開業すれば手術室に関わらなくて済みます。患者さんが来やすい時間に外来を開けるのも魅力に映りました。「麻酔科医」というと、医療者の方も何となく「技術職の人」と思うかもしれません。確かにそうではありますが、私は患者さんその人を診ていくことが好きだったので。

開業に当たって特別に強い思いはありませんでしたが、それでも患者さんのさまざまな要望に応えるクリニックでありたいとは思っていました。内科を標榜して風邪や生活習慣病などを診つつ、疼痛コントロールという私の専門が生かせる場合はしっかりとそこもやっていく。こんなクリニック像を描いていました。



クリニックでは珍しい売店やカフェスペースも

◆土地 邦彦（どち・くにひこ）氏

1974年、信州大学医学部卒。麻酔科医として山梨県の巨摩共立病院や甲府共立病院に勤務した後、1992年に開業。医療法人「どちペインクリニック」の理事長として「玉穂ふれあい診療所」と「玉穂訪問看護ステーション」を運営する。在宅医療も行い、また有床診療所として緩和ケアにも取り組む。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

